「星空と路―これまでの記憶、これからの記録―」アフタートーク 島津信⼦×福原悠介

開催⽇時：2019年3⽉9⽇ 10:30-12:15

話し⼿：島津信⼦、福原悠介（映像作家）

進⾏：村⽥怜央（せんだいメディアテーク）

島津：島津信⼦と申します。みやぎ⺠話の会に属しておりまして、⻑年教員をやっていましたけども、いまはフリーというか、⾃宅におります。

福原：福原悠介と申します。作品をご覧いただきありがとうございます。僕は普段映像の仕事をしていて、⺠話の会のみなさんとは、メディアテークの「⺠話 声の図書室」という⺠話の映像記録を作るプロジェクトを⼀緒にやらせていただいた関係でお声がけいただき、この『飯舘村に帰る』の撮影と編集をやらせていただきました。

村⽥：進行を務めさせていただく、せんだいメディアテークの村田です。まず、飯館村がいまどういう状況なのかというのをお話しできたらと思うんですけれども、2011年の3⽉に震災と原発事故があって、映像のなかでは仮設住宅に⼊ったのが6⽉ころとのお話がありましたが、ここで結構時間が空いているのは、避難することになってから仮設の準備をするということで、ちょっと遅れたという形になるんですかね？

島津：村で建てた仮設住宅は、7⽉くらいに完成したと思います。私が関わらせていただいた国⾒の仮設というのは、福島県の国⾒町の⼈たちが地震のために避難する場所として建てた仮設だったんですが、思ったほど⼈が⼊らなかった。それで、飯館村がそこを借り受けた形で⼊られたんですね。だから⽐較的ほかの⽅々よりは早く⼊れたみたいです。

村⽥：ではやっぱり最初は、飯館村の⽅たち⽤の仮設住宅というのは考えられていなかったということですか？

島津：まだ準備が整わなかったということで、国見のほうは早くに出来上がっていたということになると思います。実際の飯館村は、報道でもあったと思いますけども、なかなか避難という形にならなくて、これだけの線量があるということも少し遅れて報道されたと思うんですね。だから村の⼈たちも最初はわからなくて、そのまま住み続けた⽅もたくさんいらっしゃったということだと思います。

村⽥：そして仮設住宅に⼊られ、みなさん6年くらいそこで過ごされて、2017年の3⽉に避難解除ということになりました。帰村された⽅がもともとの1割くらいと聞きましたが、みなさんやっぱりご⾼齢の⽅が多いんでしょうか？

島津：ほとんど、まあ⾼齢って⾔っていいかな。60代が⼀番若いくらいじゃないですか？　70代、80代、90代の⽅々が多いと思うんです。私もネットで調べたときに、飯館村の人口は6000から7000⼈くらいだと書いてあったんですが、いま現在、村に戻った方は1000⼈くらいかな。だから1割よりは多いかなと思います。ただそのなかには、ここにいらっしゃる佐藤さんご夫婦のように、福島のほうにも村にもおうちがあって⾏ったり来たりしている、そういう⽅もいらっしゃるので、本当にこの村に純粋に住んでいらっしゃる方というのは、その数よりも少ないのかなと思います。

村⽥：そして帰村されて、いまご覧いただいたインタビューをしたという時系列になると思うんですけども、最初に飯館村のみなさんにお話を聞きに⾏ったりして交流を始められた経緯について、島津さんからお伺いできたらと思います。

島津：はい。私は⻑年⺠話をやっているので、⺠話の語り⼿の方がいらっしゃらないかなというようなことや、⾃分が語れるお話を何かに使えないかなということもあり、震災のあとも教員⽣活を何年か続けたんですけども、退職のちょっと前に、私たちの仲間の柴⽥さんという方が国⾒の仮設に⾏ってお話を聞いてもらっているというのを聞いて、私も⼀緒に連れて⾏ってもらいました。それが最初のきっかけです。まだそのときは在職中だったんですが、次の年に辞めたところで、最初はその柴⽥さんが「屁ったれ嫁御」の話をしたら、すごいみんな、いままで溜まっていたものがその笑いで吹っ切れたという感じで、柴⽥さんが⾏くと「屁ったれ、屁ったれ」と呼ばれるようになったとかそんな話も聞いていたので、私も何か楽しい話ができないかなあと思って。私が⾏ったときには狐の話をしたんですけれども、⾃分も狐に化かされたことがあるよという話をしてくれる⼈もいましたし、あと、ここに出てきた花井トヨさんは本当にご苦労をされた方で、ちいさいころに炭焼き⼩屋のところでお⽗さんから聞いたという昔話をいくつか聞かせてくださったんです。このトヨさんのお話と不思議な体験を、こんなおばあさんがいたということで記録しておけないかなと思って、最初はそれを福原さんにお願いして、⼀緒に⾏ってもらいました。

そのときに元正さんやほかの⽅々にも会っていただいて、この⼈たちの話を記録したいなと思いながら、でも昔話をしているわけでもないしどうだろうなあと、⾃分でも中途半端な感じでいたんです。その後もときどき⾏事に呼んでいただいて、私の拙い話を聞いていただいたりしながら少しずつ交流はずっと続けていたものですから、このわすれン！の話をいただいたときに、ああそうだ、何て言ったってやっぱりこの⼈たちの想いだと。実際に仮設から村に戻られて、最初はみんな、このトヨさんなんかも、ああせいせいしたよっておっしゃるんですけども、その後1年2年と経つうちにだんだんしぼんでいくような気がして、でもやっぱり村に戻って良かったという想いを持っている⽅々なので、この想いを記録できないかなと思いました。それで福原さんに改めてお願いして、⼀緒にインタビューというか、お話を聞かせていただいたものです。でも、本当にうまく編集していただいたなあと思っています。

村⽥：最初に国⾒へお話をしに⾏かれたのは、いつごろですか？

島津：最初に⾏ったのは2013年の12⽉でした。2014年には、私は「みやぎ⺠話の学校」という、丸森で行なっている民話に関わる人たちのイベントというか集まりを持っていたんですが、国⾒の仮設の⽅々のお話は昔話や⺠話とはまたちょっと違うものだったので、そのなかでは佐藤さんご夫婦に来ていただいて、体験を聞かせていただいたりしました。あと国⾒ではないんですけど、松川のほうの仮設にいらっしゃる菅野テツ⼦さんという方には、昔話を含めていろんな避難のお話とかを聞かせていただいたりしていました。

村⽥：インタビュー映像となると答えていただく方が固くなってしまいがちかなと思うんですけど、2013年ころからコミュニケーションを取られていただけあって、すごく良い空気でインタビューできているなあと思って⾒ていました。そうすると、花井トヨさんのインタビューが最初ということですよね。福原さんが飯館村に⾏ったのはそのときが初めてですか？

福原：そうですね。撮影の前に１回顔を出しに⾏って、そのときはカメラを回さずに、2回⽬に⾏ったときにこの映像を撮影しました。それまでは全然⾏ったことなかったです。

村⽥：最初カメラを持って⾏ったときに、いろいろお話を聞いたりとか、村の様⼦を⾒たりすると思うんですけど、印象はどうでした？

福原：本当に平らでだだっ広い、すごくでっかいところなんですよね、飯館村って。特に⽬印になるような建物もなくて、どこを⾒ていいのかわからないみたいな場所で。たまにさっき出てきたような、放射能汚染された⼟を⼊れたフレコンバッグの⼭がどーんと出てくるみたいな。そして、⼈もいない。たまに⼯事の⼈がいるような感じで。何をもって印象としていいのかわからないような場所、という感じですね。何を思い出せばいいのかわからない。

村⽥：そうですよね。インタビューに答えていただいている方は、村の良いところとか、明るい感じでお話してくれる方が多いなという印象だったんですけど、その間に挟まる⾵景は⼯事の様⼦だったり、⼈がだれもいなかったりして、そのギャップがすごいなと。それでもお話される方からは村への愛情みたいなものがすごく感じられるんですが、外を⾒ると、以前の村とは状況もたぶん違うじゃないですか。ご近所づきあいとかもだいぶ変わっていると思うんです。でもやっぱり⾃分の村に対して、帰村された⽅だからということもあるとは思いますが、すごく強い愛情もあって、そういう部分をみなさんお話されているなと思いました。僕は仙台出⾝なんですが、⾃分のこととして考えたときに、仙台に対してそこまで思えるかなと考えると、ちょっと思えないような気がしているんですね。『飯舘村に帰る』でインタビューに答えていただいたみなさんは、故郷に対する強い思い、愛情みたいなものって、やっぱりすごくあるんですかね？

島津：飯館村って本当に⾼いところにあって、作物もなかなかうまく育たない、たぶんお⽶の収量とかも平らな暖かいところに⽐べたら少ないかなと思うんです。でもそんななかで、「までえな村」、「までえ」というのは丁寧とか優しいという、そういう思いの村ということで、美しい村百選に選ばれたりしていたところなんです。私が佐藤さんご夫婦に⼀番最初に村に連れて⾏ってもらったときは、オオカミの天井絵がある⼭津⾒神社とか、ここには酒屋さんがあったとか、ここではコーヒーを出していたとか、本当に村の良いところをいっぱい案内してもらったんですね。ああこんなに⼤事にしている村なんだなあと思って、やっぱり私も⾃分の⽣まれたところや住んでいるところをこんなに⼤事に語れるかなあという思いでいました。それが第⼀印象だったんですね。

そういうところについて、どうしてなのかなと思いながら、菅野重⼦さんが、いまは本当に⾃分の家にデンと座って毎⽇向かいの⼭を眺めているんです。おれはこの⼭⾒ているのが⼀番良いんだって言うんですけれども、そうですねって⼭を⾒たときに、その真下にあのフレコンバッグの⼭が積んであるんです。重⼦さんから⾒たらこの下は⾒えないかなというぎりぎりの線くらいのところにいっぱいあって、これが現実なんだなという感じでね。これをやっぱりみんなにわかってもらいたいという、そういう思いはやっぱりありましたね。

村⽥：そうですね。⽬線というか、⾃分が愛すべきところは確固としてある。「紅葉が好きだから」とおっしゃっていたと思うんですけれども、やっぱり村が好きなんだなというのがあるなと思いました。

では福原さんにお伺いしたいんですけど、カメラを向けてお話を聞くときに、オンとオフというか、インタビュー撮りますよと⾔って撮ったときは、やっぱりちょっと空気が変わったりするものなんでしょうか？

福原：そう…でもなかったかもしれないけど、なるべく僕も、⼈の家に⾏ってお邪魔して撮るので、余計なことをしないようにしていたというのはあるかもしれませんが。あとは島津さんが前から親しくされていた⽅たちだったので、⾃然にと⾔ったらなんですけど、あまり余計なプレッシャーは与えなかったかもしれないです。

村⽥：最後の元正さんは、⾃分の思い出などを語っていただいたなかで、おひとりだけ男性ということもあるのかわからないですけど、フレコンバッグのことや原発、放射能のこととかに⾔及されていましたよね。やっぱりそれは、カメラがあるからというところもあったりするんですか？

福原：それは、たぶん元正さんについてはあって、ある種の覚悟を持って撮影に臨んでくれたんじゃないかと思います。撮影の途中に電気屋さんが来たんですよね。ちょっといまから停電作業を10分くらいやっていいですか、というお兄さんが来たんですけど、そしたら元正さんが出て⾏って、「いやいまちょっと⼤事なことしてっから、あとにしてくんねねえか」って。僕は脇で聞いていて、ああ⼤事なことしてたんだと思って、ちゃんとしなきゃって思ったんですけど。たぶんカメラがあったからああいうストレートな、ダイレクトな⾔葉を話してくれたというのはあるんじゃないかなと思いますけど、どうなんですかね？　島津さん。

島津：一応、元正さんにはこの撮影の前に、こんなふうに撮影に⾏きますからというお話をしに⾏ったとき、ちょうどキノコがいっぱい⽞関先にダーッと並んでいたんです。えーっ、これどうしたんですかって聞いたら、キノコ採りの話が始まって。⼤丈夫なんですかって聞いたら、⼤丈夫だ、俺の弟とふたりで⼭に⾏くんだっていう話とか、⾃分はキノコの⾒分けの先⽣だから、⾃分が⾏っている直売所からは誰もそういう⾷あたりなんて出したことないっていう⾃慢話をしてくれたり。それから仮設にいたときも、いろんなところに⾞で遊びに⾏ったこととか、楽しい話ばっかりしてくれたんですね。だから元正さんがこのときにどんな話をしてくれるかというのは、ちょっと不安なところもあったんですけど、こんなに直接的に話をしてくれるとは思わなかったです。やっぱり覚悟ってあるんだなと思いました。

村⽥：やっぱり、村の現状を伝えないといけないという想いみたいなものもあったんですね。最後に元正さんがそういう内容を話してくださったことで、前半の⽅たちが楽しいことや思い出を語ってくれていたなかにも、フレコンバッグがまだあるとか、そういう不安感みたいなものはあるんだろうなと感じて。いろんな複雑な思いを抱えながら村に住んでいるんだろうというのがすごく伝わってくる映像だなと思いました。

島津：最初のおふたりは⽐較的年齢も若い⽅々なんですけど、今度こういうふうにしますという話をしに⾏ったら、あのときいろいろ聞かれることはわかっていたんだけども、それでもやっぱり⾔い⾜りなかったということをおっしゃっていたので、まだまだ本当に深い想いがあるんだろうなと思います。

実はここに飯館村の長正さんという方に来ていただいています。

村⽥：では、来ていただいているので、少しお話をお伺いしたいと思います。

⻑正：こんにちは。⻑正と申します。この方たちはみんな顔⾒知りの方ばかりです。この映像を⾒て、最後の菅野元正さんがものすごく的を射た話をしてくれたなと思ってびっくりしています。実は私もこういう考えです。

いま飯館村は1000⼈くらいの方が戻ってこられていまして、今⽉末で⼀応締め切られますけれども、来年の4⽉になれば帰ってくる⽅がいくらか増えるのかなと思っているところです。ただみなさんのお話のように、よそにもう⻑い間避難して暮らしているものですから、うちを作られたということで、なかなか村に戻ってこられないという⽅々がだいぶ多くいるようです。私は根っからの飯館の者ですから⼾惑いなく戻ってきていますけれどもね。

村⽥：⻑正さんご⾃⾝は、村で⽣活をされていて何か思うことはありますか？　いま元正さんと同じ気持ちだとおっしゃっていましたけれども。

⻑正：そうですね、すごく不便がいっぱいです。というのはまず、⾷料品店がないということですね。コンビニは近くに2ヶ所ばかりあるんですけれども、それ以外の⾷料品店がないので、帰還した住⺠でいま声を上げているところなんですが、住⺠が少ないということで、新たに作るということにすごく⾏政のほうも⼾惑っているようです。⼀番はそこですね。

あとはさっき映像のなかで、歩いている⼈もいないようだけど、というのがあったんですけども、本当にぶらぶら歩いている方なんかひとりもおりません。ただ、いまどこも壊したり作り替えたりということで業者がたくさん⼊ってまして、映像のなかでも⾞の⾳がありましたが、そういう方はいるんですけども、夜になるととっても静かです。星だけがきれいに⾒えるっていう感じで。

不便もありますけれども、戻ってきたい⼈だけが戻ってきているので、帰ってきた⼈たちはみんな⽬がきらきらしているというか。⽼⼈の方たちの集まりが毎⽇あって、私も暇があると⾜を運んでいるんですけれども、そこに集まる⼈たちはみんな⽣き⽣きしているんですね。やっぱり帰ってきたいから帰ってきた。無理に戻ってきなって⾔わなくてもいいんでないかなと、最近思うようになってきたところです。

村⽥：いまのお話にもありましたけど、やっぱりほかのところに家があって、息⼦さんとか家族はいるけど、⾃分だけ村に住んでいるという方も結構いらっしゃるんですね。

島津：ここにいらっしゃる方は、一応ご家族と暮らしていますね。菅野重⼦さんだけは⼀⼈暮らしということになるんですけれども、息⼦さんが毎⽇のように来てくれるということで、そういう意味ではまるっきりの不安ではないとおっしゃいますけども。ただやっぱり元正さんなんかもご夫婦とも80歳を超えていますし、トヨさんは息⼦さんご夫婦と村に戻ったんですが、村に戻って何か⽉もしないうちにその⼀番頼りにしていた息⼦さんが急に亡くなったんです。それもちょっと何でだろうと思われるような亡くなり方で、本当に⽣活は⼤変だろうなと思います。

村⽥：ありがとうございます。そろそろまとめに⼊ろうと思いますが、島津さんは2013年から飯館村の方たちと交流を始められて5年、6年くらいになると思うんですけど、その時間の流れのなかで、いろんな姿を⾒たりお話を聞かれたりして、何かみなさんの印象などが変わった部分はありましたか？

島津：仮設にいらしたときは佐藤さんご夫婦がお世話⼈だったんですね。それで私もずっと、⾏事のたびに何回もお声がけいただいていたんですけれども、そこからだんだん急に⼈が減っていく。急に仮設のなかで亡くなる方もいらっしゃれば、引っ越して行ったんだって、ということも聞く。もともと数が多くないなかで、亡くなったときにその親戚の⼈に知らせたくても、なかなか情報もうまく伝わらなくて。いちいち村の役場を通してでないと、それもあちらからご連絡をいただかないと、亡くなりましたよということも知らせられないような状況だったので、⼤変いろんな、⾒えないご苦労があったんだと思います。

でもそのころは村に⾼齢の方が多かったので、戻りたいという想いでいたと思うんですけれども、やっぱりいざ戻ってみて、⾃分はこれで良いんだっていう、半分ちょっと居直りっぽい感じのね、気持ちもあると思うんですけれども、やっぱりみなさんが、本当に村の将来とか今後を考えたときにうんとよぎるものは、不安の想いなんじゃないかなって思っていますけども。

村⽥：そうですね。いま居直りとおっしゃっていましたけども、どこか清々しさみたいなものがあるのかなと思いながら⾒ていました。もうここで⽣きていくんだという折り合いというんでしょうか。息⼦さんたちと離れたりとか、いろいろと悩まれる、葛藤もあるとは思うんですけれども、それでもやっぱりここで⽣きていきたいという気持ちがあるんですね。そういうのが、故郷のこともそうですし、あとはやっぱり放射線の被害を受けたというのが、仙台の内陸に住んでいるとなかなか実感しづらい部分があると思うんですね。

そのふたつの部分があって、そういうところについて⾃分はどうだったのかと⽴ち返ると、少し考えるきっかけにもなるのかなと思ったりしました。

では、会場の⽅から感想や質問などを受け付けたいと思うんですけれども、何かありますか？

会場A：私も島津さんと⼀緒に⺠話を聞き歩いている仲間なんですけれども、今⽇はありがとうございました。さきほどお話にもあったんですけど、5⼈の方の表情がとっても良いことが⼼に残りました。今⽇はとっても良い映像を⾒せていただいたなという気持ちと、また⼀⽅では、たとえば佐藤祐⼦さん。お嫁に来て⼤変な苦労をされたというようなお話が途中でパッと切れていて、もう少しお話したかったとおっしゃっていたということでしたけど、飯館で暮らしてきて、原発事故に遭って、そしてどういう想いでここに戻ることにしたのか、佐藤祐⼦さんもだし、みなさんのお話をもうちょっとじっくり聞いてみたいなという気持ちも残りました。感想になると思うんですけど。

村⽥：たぶん、ここに⼊っていない部分の映像もたくさんあるんですよね。そういったものも何かの形で出していったり、⾒られる機会があってもいいのかななんて思いますね。

会場B：この話とは直接関係ないんですが、飯館村というのは、⾏政上今後どういう形でやっていこうとしているのかというのが知りたくて参加したんですけれども。⾒ると60歳以上の方が1000名近く帰られたということなんですが、⻑野県にも姥捨という村があって、JRから眺めると⾃然環境が素晴らしい、段々畑なんかがあってね、環境が⾮常に似ているなと思って映像を⾒てたんだけど、なんか表現が悪くて失礼になるんですが、60歳以上の⼈ばっかりの姥捨てっていうような感じの環境になっていて、将来の姿が、⾏政はどういう形で⼈を呼んで村を⽴て直すのかという、ヴィジョンがちょっと⾒えないのね。七ヶ宿町では、⼀⼦には30万、⼆⼦には50万、三⼦には70万、⼩学校、中学校出るまで学費⾷費は無料というような形で町おこしをやって、どんどん若い世代を集めようとしているところもあるんで、ちょっと飯館村の将来ヴィジョンが⾒えなくて、どうなっているのかなというのが私は気にかかりました。

島津：飯館村の⼩学校、中学校、それから幼稚園、保育所、その世代で⼀貫の⼤きな建物というか学校を作られたんですね。いままでの既存の学校も結構⽴派な建物だったんですけども、そこは線量が⼼配だということで使わない⽅針で、⼤変⽴派な学校を作られて、いま⼦供たちが100⼈くらい通っていると⾔うんですが、実際は、村に住んで通っている⼦供は10⼈くらいでしょうか。それ以外は、福島とか川俣とか近隣の避難先からスクールバスで通っているみたいです。とにかく⼦供たちを集めたいというので、そのバス代から、経費もすべてタダで、有名ブランドの制服があって。⼦供たちを集めればその親の世代も集まるんじゃないかということで村としてはやってはいらっしゃるんですが、やっぱり七ヶ宿とはまた違うところがあるんだろうと思いますが。

村⽥：村の外から⼩学校に通っているというのは、村に住むのはやっぱり不安や⼼配があるからということなんですよね。そうですよね。今後のこととなるといろいろ難しい部分もあるとは思いますし、先のことも重⼤な問題だとは思いますけれども、いまはまず帰られて、みなさんが住んでいらっしゃるということですね。

会場C：私は⽥舎が川俣町の⼭際なんですけれども、状況としては飯館村と同じで、いまは両親が同じように戻って、⾏ったり来たりして暮らしています。商店をやっていたので、震災前は、映像に出てきたような方たちが⼊れ替わり⽴ち替わりやってきて、おしゃべりをしたりという⽇常が毎⽇あったので、今⽇はそういういろんな人の、ばあちゃんとかじいちゃんの話を聞く時間がまたあったような気がして、とても懐かしく思いました。

それで、若い⼈がやっぱり戻ってこられないという状況がいろいろあると思うんですけれども、私も震災当時実家には住んでいなかったので、出⾝地として⼼配という気持ちもあり、ただ実際に住んでいる両親とは違う、当事者と当事者ではないっていう線引きがすごく、家族のなかにもあって。⾼齢者が戻って、⼈⼝が少ない状況で暮らしているというところから、私たちはどういうふうにやっていけばいいんだろうということをずっと考えるんですけど、ちょっと答えが⾒えなくて。たぶん飯館に戻ってきていない若い世代の方々も同じように考えることがあると思うんですけれども、そういったところも聞いてみたいと思いました。

福原：ありがとうございます。そうですね、確かに、帰って来られない、来ない選択をした若い⼈たちの話というのはあまり聞けなかったですね。島津さん聞いたりしました？

島津：⽴派な復興住宅が作られたんです。そこに⼦供さんが3⼈いる方が戻られたということを聞きました。それはやっぱり村を想う気持ちと、たぶん学校が全部タダで、住宅そのものもきっといろいろと恩恵を受けるところがあるのかなあと思います。でもそのお⼦さんたちがみんな学齢を超えたときに、果たして村に残るんだろうかというところについては何とも⾔えないので、本当に先が⾒えないというのが、強い想いだと思うんです。だから佐藤ツメノさん、祐⼦さんとか、最初のほうに語られた方が⾔い⾜りなかったというのは、そこの部分なんじゃないかなと、私は話を聞いてたんですけれども。

村⽥：いま、当事者と当事者でないという話もありましたけど、村の外に出てしまうと、そういうことを話しづらかったりもするんですかね？ それで、なかなか話題として挙げづらかったりもするのかなと思いますね。それは仙台と福島とかでもそうだと思いますし、仙台の沿岸部と内陸でも、なかなかやっぱり状況が違ったり、被害が違ったりすると、気にはしていても話題にしづらいということは多々あることだと思いますね。ただ村の今後ということを考えたら、若い方とかもいれば続いていくのかなという気はしますけどもね。

島津：まだ仮設にいる、帰村になる前に⻑正さんと話をしたときに、村に戻るの戻らないのということは話題にできないとおっしゃったことがあって。やっぱりそのなかでもかなり揺れながら、この⽅々は⽐較的強い意志で、⾃分だけは戻るんだということで戻った方が多いと思うんですけれども、戻らない選択をした方や、いまもうんと迷っている方もいらっしゃって、どこまでを当事者と⾔うのかというのは、その⽴場にならないとわからないことだと思うんだけども、難しいことだなと思います。

村⽥：そうですね。帰るか帰らないかというのもそうですし、帰っても今後どうするのかということもあるので、いろいろ悩んだり葛藤したりというのはたくさんあるんだろうなと思います。

会場D：活動をされている方や村⻑の話などはテレビでよく⾒て、話を聞く機会はありましたけれども、⼀般の方のお話をまとめて聞く機会はなかなかなかったので、貴重な声が聞けたと思います。

いま若者のことが出たので、私の知り合いに若い方がいるんですけれども、その方は飯舘村には住んでいなくて、いまでも⼤変な状況があるのでそういうことを発信すると、村⻑からプレッシャーをかけられるというふうに⾔っていました。そういう状況だから、帰られる方とかが話しづらい状況がどんどんできていくのかなと思います。

あと、さきほどももうちょっと話を聞きたかったという話が出たんですけど、編集におけるポイントというか、⼊れる話と⼊れない話というのをどういう観点で切っていったのか、それから先ほど⾏政の⾏き先が⾒えないというお話も出たと思うんですが、村や政治に対して何か不満とかそういうものがあったのかどうか、その2点をお聞かせください。

福原：編集は基本的には僕がやったんですけれども、⼀番気をつけたのは、なるべく震災には直接関係ない話を⼊れるということですね。最終的には、元正さんの⾮常にダイレクトなメッセージを僕も現場で聞いていてとても感動したので、これを⼊れたいと思ったんですけれども、でも必ずしもそれだけではない、それが結論にならないようなものにしたいというのはありました。

震災から時間が経って、これからの話というのはいまも出ていたようにとても重要なんですけれども、むしろもっと過去に遡ったり、あるいはもっと遠い未来だったり、⽴体的に時間が⾒えるようなものにしたいと思いました。トヨさんの80年前の家出の話とか、基本的に震災には何も関係がないと⾔えばないんですけれども、それを80年後に僕らが聞いて、それを撮影して編集して、いまここで⾒ているという⽴体的な時間の流れみたいなもののほうが、むしろ飯館村に震災前から流れていたものを想像するきっかけになるんじゃないかなということです。そういうことを意識しました。あとは元正さんの亡くなった奥さんの遺影とか、震災があってもなくてもその⼟地でたくさんの⼈が⽣きていて死んでいってという歴史があるので、そういう⻑い時間軸を⾒せたいというのが編集の意図です。

もう⼀つは何でしたっけ。政治的な…難しいですね。不満はもちろんあったと思いますが、特に祐⼦さんや重⼦さん、みなさんそうですかね。でも何らかの意味で諦めないわけにはいかないという、ある種の諦念がみなさんあったと思うので、それを実際にどう考えたらいいか、難しいところですが。不満は絶対にあるとは思いますが、それを⾔ってもしょうがないというところがスタート地点になってしまっていると思います。

島津：このなかにはいないですけども、インタビューさせていただいたときに、村⻑さんが帰れっていうんだから私は帰ってきた、という⾔い⽅をされた方がいたんです。でも、それは⾃分が建てたおうちに戻られたということでもあるし、いわゆる町からの圧⼒であったり政治的なものについては、⾔葉の端々には出てきますけれども、直接的なものはそんなにはないかなと思います。

ただ、実はトヨさんの息⼦さんが亡くなった状況というのは、お医者さんは、わかりません、死因がはっきりわかりませんというような⾔い⽅をされるんですね。その息⼦さんも、もしかしたら原爆病じゃないかなと私なんかは思ったくらいなんですけれども。そういう⽅のお話は、なかなか直接的には表には出てこないことだと思うし、ましてやそういう不安のいっぱいあるところに、⼦供に帰れとは⾔えないんだろうなと思います。

村⽥：だから、みなさん不安やリスクはあったうえで、どこかで折り合いをつけて、でも⽣きていく。ここで暮らしていくんだみたいなところがあったりするんですかね。その⼀⼈ひとりのエピソードや想いみたいなものを記録して編集していただいたことで、飯館村のお話なんですけど、飯館村でなくてもというと変ですが、すごく広く捉えられるような作りになっていると感じました。いろんな想いがあり、葛藤のなかで暮らしているというのがすごく感じられて、⾃分⾃⾝も震災のことをまた考え直すときに、すごく良い映像だなというふうに思って拝⾒しました。

ではそろそろ時間ですので、終了したいと思います。今⽇はご来場いただきありがとうございました。